

2021(令和3)年度東京分室 PD 研究員個人研究成果報告

個人研究

『教行信証』の解釈史の研究

研究代表者・元東京分室 PD 研究員 青柳 英司
(真宗学)

本研究は、親鸞(1173-1262)の著者とされる『教行信証』の解釈史を整理すると共に、その批判的検証を行うものである。2021年度は特に、「教巻」に関する先行研究の整理と検証を実施した。本稿では特に、①「出世本懐に関する議論」と、②「仏仏相念に関する議論」の2点について報告する。

まず、①についてだが、親鸞は「教巻」において、「夫れ真実の教を顕さば、則ち大無量寿経是れなり」と述べる。親鸞が『大無量寿経』(『大経』)を真実教とした理由について、存覚(1290-1373)は、『大経』は出世本懐の經典であるため、真実教であると説明している。この理解は、以後の多くの研究に踏襲されるものである。

筆者は、鎌倉期の浄土教文献を広く調査し、浄土教や本願・念仏を説くことが、釈尊の出世本懐であるとする理解は、源空(1133-1212)とその門下の間で広く共有されたものであったことを指摘した。すなわち、『大経』を真実教としたのは親鸞の独断ではなく、源空門流の共通理解を踏まえて、主張されたものであったと推測されるのである。

また、仏教一般において真実教の決定は、教相判釈という手段を用いて為されるのが一般的である。しかし親鸞は、「教巻」で教相判釈に類する議論を一切展開しない。しかも、親鸞は教相判釈という方法に、一切関心が無かったのではない。「信巻」や「化身土巻」、『愚禿鈔』などでは、教相判釈的な議論が展開されているのである。この理由を説明する先行研究も見られたが、十分なものではなく、この点は今後の研究課題であると言える。

他方、近年の研究では教相判釈的な発想を、「教巻」の解釈に持ち込むこと自体が批判されている。教相判釈は、他宗に対する自宗の優位を主張するものとして使われる場合が多く、そのような護教的・排他的な議論を、多様性が重視される現代において再生産することが、疑問視されているのである。そして、このような視座から従来とは異なる真実教の解釈も、複数提示されている。しかし、未だ議論は途上という印象であ

り、定説と言えるようなものは見られないのが現状であると思われる。

次に、②の「仏仏相念」についてだが、これは親鸞が「教巻」に引用する『大経』の文章の中に見られるものである。近世中期の研究では、この言葉を諸仏が互いに念じあうこととして理解する例が多い。しかし、本願寺派の僧鎔(1723-1783)になると、「仏々相念とは念弥陀三昧のことなり」(『本典一滄録』)とされ、同様の解釈は大谷派の深励(1749-1817)にも見られる。

しかし、この「念弥陀三昧」という言葉は、『大経』には見られず、親鸞自身も使っていない。一方、大谷派の鳳嶺(1748-1816)は『教行信証報恩記』において、次のように述べている。

古来の義に云わく。大寂定は即ち弥陀念仏三昧なり。釈尊、因位の行を念じて、阿弥陀仏の本願を説く。般舟讚に云わく。「三世諸仏依念弥陀三昧成等正覚」と。此の意なり。竹林鈔の下に、去来現仏相念の八字を引きて、妙覚の如来、弥陀の名号を称念するの義と為す。今謂わく。此れ等の義、経文末だ詳らかならず。諸仏、互いに諸仏の法を念ずるは、常の事なり。異義と為すべからず。然りと雖も、釈尊、今弥陀の本願を説かんと欲して、大寂定に入りて、当に念仏三昧の法を念ずべし。今文の阿難、諸仏の例を挙げて、今仏の事を察す。阿難、豈に釈迦の弥陀を念ずるを知らんや。

(『真宗全書』21・25頁)

ここに引用される「三世諸仏依念弥陀三昧成等正覚」という言葉は、善導(613-681)の『般舟讚』には見られず、西山派・顕意(1238-1304)の『浄土宗要集』にはほぼ同文が見られる。また、『竹林鈔』も西山系の著作である。ここから、「古来の義」というのは、西山義系統の思想であると思われる。

つまり、僧鎔や深励、鳳嶺などは、西山派の著作を参照しながら、「教巻」を解釈していたと言えるのである。従来、近世宗学における他派典籍の受容状況は、あまり明らかにされてこなかった点であるが、ここはその一端が窺われる箇所であったと言えるだろう。

以上の2点を含む研究成果は、『近現代『教行信証』研究検証プロジェクト』第4・5合併号(親鸞仏教センター、2022年)に、「研究レポート」として掲載されている。